

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月16日現在

機関番号：32614

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H03242

研究課題名(和文)近世における前期国学のネットワーク形成と文化・社会の展開に関する学際的研究

研究課題名(英文)A multidisciplinary study on the network formation of the first term Japan studies in the modern era and the development of culture and society

研究代表者

根岸 茂夫(Negishi, Shigeo)

國學院大學・文学部・教授

研究者番号：30208285

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,100,000円

研究成果の概要(和文)：前期国学と近世の文化・社会・政治の人的ネットワークに注目し、18世紀の社会を総合的に考察した。国学四大人の筆頭荷田春満を中心に論じ、前期国学の始点となる契沖と春満との関係も確定した。春満が享保期の文教政策と深く関係し、儒学者と関係を持ち、彼らの学校設立に啓発され、国学の学校設立を企図した過程を明らかにし、前期国学成立の過程を政治・文化・社会の中で位置付けた。のち養子荷田在満を中心に神道学・歴史学・文学・日本語学・法制史の基礎を築いていく過程も論じた。春満の弟信名の日記から2,194名に上る人名を抽出し、前期国学の人的ネットワークを描き出した。原典の検討により現在流布のテキストも多く訂正できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

前期国学を18世紀の社会に位置づけて総合的に考察するとともに、新史実を明らかにした。契沖と荷田春満との関係、儒学者と春満が相互に学校設立計画に与えた影響など、近世中期の学問や教育、文化・社会・政治の研究に影響を与える問題である。調査の中心とした京都市東丸神社東羽倉家文書に加え、伏見稲荷大社、京都府総合資料館などの史料収集に努め、総合的に研究を発展させる基礎的な史料を構築した。その他、伏見稲荷の社家や周辺の地域の動向を考察し、信名の孫にあたる信郷の日記や文芸史料の検討から和歌など文芸とネットワークの検出にも繋がった。収集史料のオーロラ記事が天文学研究にも利用され、人文科学以外の学問に貢献できた。

研究成果の概要(英文)：We discussed the first term Japan Studies and the society of the 18th century in a comprehensive manner, focusing on Kadano Azumamaro. The relationship between Keichu and Azumamaro has also been finalized. Azumamaro was related to the culture policy of the Shogunate government, was enlightened by the establishment of a school of Confucianism scholars, clarified the process of attempting to first term Japan Studies, and positioned the establishment of the first term Japan Studies in politics, culture and society. Later, he discussed the process of establishing the foundation of history, literature, language and legal history centering on adopted Arimaro. We found 2,194 people from the diary of brother of Azumamaro, and clarified the human network of the first term Japan Studies. We have also corrected the text now in circulation as a result of the search of the original.

研究分野：歴史学

キーワード：国学 荷田春満 歴史学 神道史 文学 日本語学 法制史 史料学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、国学の祖と称される荷田春満(一六六九 - 一七三六)とその学統によって構築された人的・知的ネットワークの形成と実態、およびそこで発展・継承された学問・文芸を、一次史料の実証的な研究から解明する。和・漢の総合的な学問をふまえ、主体的に日本の歴史・文化・伝統を追求しようとした「総合的人文学」ともいべき荷田春満の学問「荷田学」を、史学・神道学・文学・法制史による学際的・総合的な検討を加えて、十八世紀以降の近世社会・文化の展開の中に位置づけるとともに、新たな近世国学像を提示することを試みるものである。

現在、近世国学の実証研究は、宮地正人を中心とした平田国学関係文書研究が、平田国学自体の再検討という段階へと進展しているように、近世国学の従来の枠組やイメージは大きく変容しようとしている。また、十八世紀を「雅俗」の調和とし、近世の典型と見る中野三敏の文芸史説(『十八世紀の江戸文芸 雅と俗の成熟』)などのように、近代から照射された近世観、特に十八世紀の日本の学芸に関する理解を打破しようとする視点も登場している。長い間、春満の研究は、三宅清『荷田春満の古典学』(正・続)がほぼ唯一のまとまった研究成果であった。しかし、分析対象が書籍に限定され、文書史料の分析には及ばず、社会的文脈の考察も欠落していた。政治・経済面も含んだ国学の社会的諸影響に関しては、伊東多三郎の「草莽の国学」研究などが先駆的業績であるが、対象は幕末維新期の平田篤胤没後門に集中しており、春満・賀茂真淵など十八世紀の前期国学への注目は立ち遅れている状況にあった。

この状況を打開するために研究代表者は、二つの科学研究費による課題を研究した。第一に、平成十五～十八年度実施の「近世国学の展開と荷田春満の史料的研究」(課題番号一五三二〇〇八六)では、従来未公開であった春満の生家、東羽倉家文書(東丸神社所蔵)の目録化を完了させ、東羽倉家所蔵史料の概要を把握した。春満の著述類についても、國學院大学の編纂による『新編荷田春満全集』一～一二巻(おうふう 平成十五～二十二年)が刊行され、研究基盤が整備された。第二に平成二十二年～二十五年度実施の「近世における前期国学の総合的研究」(課題番号二二三二〇 - 三〇)では、東羽倉家文書を主たる検討対象として、国学の揺籃期たる十七世紀後期から十八世紀前半を、わが国における自国を対象とした総合的人文学の萌芽が形成された時期と捉え、それを近世社会・文化の展開に位置づけるべきとの課題を提起した。なお、二つの科学研究の波及効果として、研究分担者の学位論文が、一戸渉『上田秋成の時代』(ペリかん社)、松本久史『荷田春満の国学と神道史』(弘文堂)、渡邊卓『日本書紀』受容史研究』(笠間書院)として刊行され、春満が前期国学展開のキーパーソンであるという知見が獲得された。二十六年度も國學院大学より特別推進研究費を得、人的ネットワークの究明に努めた結果、新たな知見として徂徠学派や懷徳堂関係儒者と春満が交流していたことが明らかにするなど、未開拓の領域が多く残されていることも確認された。

本研究は近世文化・社会の転換期・分水嶺としての十八世紀に注目する。享保期における將軍吉宗の文教政策を起点として、儒学・国学・蘭学という近世の学問が各々の転機を迎えた時期に、幕府の和書調査に直接に参与した春満と、それを継承した荷田派の学問実態の解明、すなわち儒学と併立しつつも自国を対象とした学問の総合化を図ろうとした過程を明らかにして、近現代に至って付与されてきた国学へのバイアスを相対化し、単線的な「国学四大人」観とは異なる国学像を十八世紀社会の中に位置づけることを試みる。本研究では、近代準備期というような単純な発展段階観に陥らない、新たな研究的視点の獲得が目指されているのである。

以上の点から、詳細な学術的分析が急務な状況にあると考え、平成二十七年「近世における前期国学のネットワーク形成と文化・社会の展開に関する学際的研究」を申請し、基盤研究(B)(一般)に採用され補助を受けることができた。

2. 研究の目的

本研究は、荷田春満(一六六九 - 一七三六)とその学統によって構築された人的・知的ネットワークの形成と実態、およびそこで発展・継承された学問・文芸を、京都市伏見区東丸神社所蔵「東羽倉家文書」の検討を中心に関係史料の実証的な研究から解明する。和・漢の総合的な学問をふまえ、主体的に日本の歴史・文化・伝統を追求しようとした「総合的人文学」ともいべき荷田春満の学問「荷田学」を、荷田春満とその門人・周縁の人的・知的ネットワーク、春満とその門流の学問の社会的影響、神道史的考察および伏見地域との関連、江戸・上方文人社会の発展と春満の学統、の四軸の課題設定のもとに、史学・神道学・文学・法制史による学際的・総合的な検討を加えて、十八世紀以降の近世社会・文化の展開の中に位置づけるとともに、新たな近世国学像を提示することを試みる。

3. 研究の方法

東羽倉家文書は、現在確認できたもの七八〇〇点余であり、史料は、A 荷田春満関係史料約一〇〇〇点、B 羽倉家関係史料約八〇〇点、C 社家・社務約一五〇〇点、D 学芸約一五〇〇点、E 書籍・刷物約三〇〇〇点の五分類を施し、さらに細目を作成して原則として編年に分類し、一点ずつ中性紙の封筒に入れており、原則として分類番号順に桐製の箱一二〇箱に収納してある。

東羽倉家文書は、伏見稻荷の御殿預であった東羽倉家が社務を遂行しながら作成・保管してきたC社家・社務関係史料がまず形成され、殊に十七世紀中葉から次第に体系化していった。

Cの体系化とともに、東羽倉家の「家」も整えられ、B羽倉家関係史料も形成する。特にCの体系化とBの形成が、荷田春満の実父羽倉信詮(一六四二—九六)の時代に形成されていることは、伏見稲荷社の構造と社家組織、朝廷・幕府との関係や近世的な信仰の広がりなどを考察する視点から重要である。特にこの時代に春満が成長して学問を形成していくことも、史料群の性格を考慮する必要がある。また信詮の時代から日記が書き継がれ明治初年まで続いていることも、史料群全体を位置づけるなかで重要な意味を持っている。信詮の時代に史料の体系化が始まり、この時期に信詮の実子として春満が誕生したのである。なお、Bの日記の中で、春満が活躍した時代を最も克明に示す日記が、春満の弟で伏見稲荷御殿預となった信名の記録であり、信名の日記の分析が、本研究の最も重要な柱として位置づけられる。

春満が学問を形成し、それが近世社会の中に浸透する過程で、C、Bに続き十七世紀末から十八世紀前期にかけて、A荷田春満関係史料が形成される。春満の稿本・著作写本のうち、主要な史料は『新編荷田春満全集』に収録されたが、親族・弟子の書状は軸装・表装された史料、春満の著作の草稿の紙背文書、襖の下張りから発見された史料など多様で約五〇〇点に上るが、この史料の解読と分析が石岡康子を中心に進められており、本研究の大きな柱である。

春満死後の十八世紀中葉以後、東羽倉家文書は、C社家・社務関係史料、B羽倉家関係史料が一層整備体系化されて残っていく。同時に十八世紀後半に御殿預として活躍した信郷(信名養子)が、上田秋成・小沢蘆庵など上方文人とのネットワークを形成し、東羽倉家文書のうちに、D学芸関係史料が形成されるようになる。またE書籍・刷物も蔵書として形成される。この問題が近世後期に春満の検証や伝説化につながり、春満の学統とどのように関わっていくのかは、一戸渉の研究で提起され、分析を進めているところである。

七八〇〇点に及ぶこれらの史料を、現地調査によって一点一点確認しながらその内容をさらに精査し解明する。十七世紀後半から十八世紀中葉までの近世社会のなかで、前期国学が成立し発展を遂げるとともに文化・政治・社会に大きく影響を与えながら展開し社会に定着していく様相を、これらの史料に登場する人物の人的知的ネットワークに注目しながら検討した。

以上の研究遂行のため、平成二十七年より東羽倉家文書を所蔵する京都市伏見区東丸神社、同じく伏見稲荷の社家西羽倉家文書を所蔵する伏見稲荷大社に年二回調査に赴き、関係史料の調査と撮影に当たった。

かつ、月一回の研究会を開催し、各自の研究成果を発表するとともに、享保二十年(一七三五)春満の弟荷田信名が江戸出府した折の日記を講読し、同時に享保八年から元文五年(一七四〇)にわたる信名の日記から、登場人物二二八二名を摘出し、そのリストを作成した。この地道かつ長期間にわたる基礎作業は、多くの研究協力者の参加によって成り立ったものであるが、この分析の中から、春満とその学統が江戸を中心に形成した人的ネットワークの検出が可能である。

4. 研究成果

研究の主要な考察は、印刷刊行した報告書に掲載された各論考に示されている。その目次は以下のとおりである。

研究の計画と概要	根岸茂夫
一 研究開始当初の背景	二 研究の目的
三 研究の方法	四 研究の成果
組織・業績・活動記録	早乙女牧人
一 研究組織	二 主な発表論文等(雑誌論文・出版物・学会発表)
三 研究会活動一覧	
「東羽倉家日記 人名・寺社名・書名索引」解題・附表	白石愛
東羽倉家日記 人名・寺社名・書名索引	
白石愛編(石岡康子・岩橋清美・太田和子・岡谷成康・上島亮平・川村由紀子・齊藤みのり・早乙女牧人・杉山哲司・竹田真依子・田中丈敏・番場夏希・宮澤歩美)	
[公開研究会の発表要約]	
国学研究史上における荷田春満	松本久史
懐徳堂中井鶯庵との関係から見る荷田春満の契沖説受容の可能性と倭学校創設構想	石岡康子
大西親盛の文芸ネットワーク 自筆歌稿『松葉集』を中心に	一戸渉
享保期における荷田派の和歌稽古会	早乙女牧人
国語学史上の荷田春満と『日本音義』	中村明裕
幕末明治期の令注釈における荷田在満説の受容	宮部香織
[史料紹介]	
寛保三年江戸駿河町両店普請祈祷二付三井八郎右衛門礼状	矢口結菜
延享元子年勅使御参向之節於当社取計方之儀松尾左兵衛方聞合二付差出例書	太田和子

研究の具体的な成果は、第一に荷田春満の弟荷田信名の日記に見える人名一覧などのリストであり、大名・幕臣、藩士・浪人、親王・公家、儒者・文人・医師、町人・職人、百姓、神職、僧侶など多様な階層が登場する。階層とともに活動概要をデータ化したことにより、彼らの社

会的・文化的活動の 実態を解明して、十八世紀国学の果たした役割の大きさを提示した。その内容は白石愛の解題に詳細であるが、このリストとともに東羽倉家文書中の春満宛書状、東羽倉家日記、和歌会等の分析から、生家があった京都、幕府の文教政策に関わって出府した江戸、中継点である浜松など、広範囲な門人ネットワークの形成がうかがえる。それだけではなく従来の通説を再検討すべき課題も見いだせた。その一つは江戸や江戸幕府との関係であり、幕府の関係者や江戸の多様な階層との密接なネットワークが形成され、それが国学の浸透に大きな影響を与えていることである。また春満や初期の国学と仏教との関係がある。春満が仏教に批判的であったことはよく知られているが、とくに比叡山・東叡山との関係があり、甥の義順が東叡山 凌雲院大僧正として東叡山運営の中核にあり、幕府から命令を受けた古典 籍収集事業にも協力している事実である。今後、春満の仏教に対する態度 も再検討する必要が出てきた。一方松本久史は神道史の立場から、以上の点も含めて整理を試みた。「荷田学」の当時の社会への影響のみならず、田安宗武に出仕した在満・賀茂 真淵、稻荷社家の大西親盛がそれをいかに継承したのかなど、後の国学への影響の具体像を解明している。同時に春満宛書状の分析から、石岡康子は、万葉集研究をめぐる春満と 契沖との関係を再検討し、春満が契沖『万葉代匠記』を入手したのが春満 の晩年であり、その入手に大坂懐徳堂の学主中井養庵が関わっていたことが明らかになった。懐徳堂など享保期の学校設立と、春満が国学 校の設立を願った『創学校啓』の作成にも関係があったことも解明している。

前期国学における人的・知的ネットワーク拡大は和歌の教育・添削や和 歌会の開催が大きな役割を果たした。荷田派の和歌会について、一戸渉・早乙女牧人が東羽倉家文書の和歌会記録を詳細に考察を加え、各新しい研究成果を提示している。和歌会とともに春満は江戸において古語や言葉を 指導し、音韻研究や東国方言の考察にも携わった。今回中村明裕が東羽倉 家文書中の断簡まで博捜しながら史料を探し、新たな考察を行っている。

他方、荷田派の国学研究は近世後期になると注目されなくなるが、春満 が將軍徳川吉宗に命じられて律令研究に携わり、養子の荷田在満に継承されて国学のなかで文献の実証的研究として地道な形で続いた。その伝統が 幕末明治の令研究に続いていることを宮部香織が考察している。

史料紹介として、太田和子は伏見稻荷に勅使が参考する際、治安などを担当した雑色松尾左兵衛との対応史料を翻刻し、伏見地域との関係を紹介した。朝廷をはじめ諸階層と神社との関係、信仰圏と地域社会などを解明に役立つはずである。矢口結菜は近世の豪商三井家と荷田家との関係について、史料を示して紹介した。江戸・上方のネットワークと羽倉家、その他稻荷社家の人々との関係を検討の材料となろう。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 14 件)

- 一戸渉「万葉書和歌をめぐる覚書」『北陸古典研究』30 巻 2015 年
- 齋藤公太「大山為起と荷田春満の『古事記』注釈」『國學院大學研究開発推進機構紀要』8 号 2016 年
- 岩橋清美「近世日光をめぐる歴史意識 - 『日光山志』・『日光巡拝図 誌』を中心として - 」『国文学研究資料館紀要』2 号 2016 年
- 松本久史「荷田春満と「荷田派」の国学者」『皇學館大学研究開発推進センター紀要』2 号 2016 年
- 根岸茂夫「近世後期武蔵の農民が著述した村の歴史物語」『東村山市史研究』25 号 2016 年
- 宮部香織「いわゆる『異質令集解』についての再検討」『法史学研究会会報』19 号 2016 年
- 早乙女牧人「史料紹介 東丸神社蔵東羽倉家文書「詠草短冊群」に関する報告 附翻刻」『渋谷近世』22 号 2016 年
- 一戸渉「藤貞幹『寛政元年東遊日録』について 附・慶應義塾図書館蔵本翻印」『斯道文庫論集』51 号 2017 年
- 根岸茂夫「荷田春満の生涯と伏見稻荷大社」(一)~(三)『大伊奈利』210~212 号 2017 年
- 岩橋清美「江戸時代の人々が見たオーロラ」『極地』54 号 2018 年
- 岩橋清美「絵画資料にみる近世人のオーロラ認識」『多摩論集』34 号 2018 年
- 一戸渉「大師流と入木道書一架蔵岡本保考宛妙法院宮真仁法親王書状小考」斯道文庫論集 52 号 2018 年
- 岡谷成康「國學院大學図書館所蔵「仁孝天皇崩御之記 付孝明天皇崩御之記 仁孝天皇御養母」の解題と翻刻」『國學院大學校史・学術資産研究』4 巻 2018 年
- 根岸茂夫「荷田春満と赤穂浪士」『國學院雑誌』119 巻 5 号 2018 年

〔学会発表〕(計 14 件)

一戸渉「万葉書和歌をめぐる覚書」北陸古典研究会機関誌「北陸古典研究」30号記念大会
 2015年
 一戸渉「和歌の真名書 大嘗会和歌からアララギ派まで」国文学研究資料館表記の文化
 学第3回(平成27年度第2回)研究会 2015年
 齋藤公太「大山為起と荷田春満の『古事記』注釈」神道宗教学会平成27年度第3回研究例
 会 2015年
 岩橋清美「近世後期における救済と言説」国史学会ミニシンポジウム「近世後期 の言説と
 身体 - 言語論的転回 のために - 」2015年
 一戸渉「松平定信の伊勢物語筆写活動とその周辺」基幹研究「鉄心斎文庫伊勢物語資料の
 基礎的研究」第三回研 究会 2017年
 中村明裕「荷田春満『日本音義』の構成について」平成29年度 國學院大學国語研究会 後
 期大会 2017年
 中村明裕「東丸神社所蔵の方言声点資料について」日本語学会 2018年度秋季大会
 根岸茂夫「近世における前期国学のネットワーク形成」公開学術研究集会 國學院大學の
 国学研究の現在 2018年
 石岡康子「懷徳堂学主・中井鶯庵と荷田春満」公開学術研究集会 國學院大學の国学研究
 の現在 2018年
 松本久史「国学研究史上の荷田春満」公開学術研究集会 國學院大學の国学研究の現在
 2018年
 一戸渉「大西親盛の文芸ネットワーク 自筆歌稿『松葉集』を中心に」公開学術研究集
 会 國學院大學の国学研究の現在 2018年
 早乙女牧人「享保期における荷田派の和歌稽古会」公開学術研究集会 國學院大學の国学
 研究の現在 2018年
 中村明裕「国語学史上の荷田春満と『日本音義』」公開学術研究集会 國學院大學の国学研
 究の現在 2018年
 宮部香織「幕末明治期の令注釈における荷田在満説の受容」公開学術研究集会 國學院大
 學の国学研究の現在 2018年

〔図書〕(計4件)

根岸茂夫『東羽倉家文書史料集二』國學院大學文学部一二〇七研究室 2017年
 川村由紀子『江戸日光の建築職人集団』岩田書院 2017年
 根岸茂夫『東羽倉家文書史料集三』國學院大學文学部一二〇七研究室 2018年
 根岸茂夫『近世における前期国学のネットワーク形成と文化・社会の展開に関する学際的
 研究』國學院大學文学部 2019年

〔その他〕

ホームページ等

近世における前期国学の総合的研究 <http://azumamaro-kokugaku.jp/>

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：岩 橋 清美	ローマ字氏名：Iwahashi Kiyomi
所属研究機関名： 国文学研究資料館	部局名：古典籍共同研究事業センター
職名：特任准教授	研究者番号(8桁): 50749653
研究分担者氏名：一戸 渉	ローマ字氏名：Ichinohe Wataru
所属研究機関名：慶應義塾大學	部局名：斯道文庫
職名：准教授	研究者番号(8桁): 20597736
研究分担者氏名：白石 愛	ローマ字氏名：Shiraishi Ai
所属研究機関名：東京大学	部局名：総合研究博物館
職名：特任助教	研究者番号(8桁): 60431839

研究分担者氏名：古相 正美
所属研究機関名：中村学園大学
職名：教授

ローマ字氏名：Furusou Masami
部局名：教育学部
研究者番号(8桁)：30268966

(2)研究協力者

研究協力者氏名：齋藤 公太	ローマ字氏名：Saitou Kouta
研究協力者氏名：宮部 香織	ローマ字氏名：Miyabe Kaori
研究協力者氏名：早乙女 牧人	ローマ字氏名：Saotome Makito
研究協力者氏名：石岡 康子	ローマ字氏名：Ishioka Yasuko
研究協力者氏名：中村 明裕	ローマ字氏名：Nakamura Akihiro
研究協力者氏名：岡谷 成康	ローマ字氏名：Okaya Nariyasu
研究協力者氏名：矢口 結菜	ローマ字氏名：Yaguchi Yuina
研究協力者氏名：太田 和子	ローマ字氏名：Outa Kazuko
研究協力者氏名：川村 由紀子	ローマ字氏名：Kawamura Yukiko
研究協力者氏名：渡邊 卓	ローマ字氏名：Watanabe Takashi
研究協力者氏名：高塩 博	ローマ字氏名：Takashio Hiroshi
研究協力者氏名：齋藤みのり	ローマ字氏名：SaiTou Minori
研究協力者氏名：宮澤 歩美	ローマ字氏名：Miyazawz AYumi
研究協力者氏名：杉山 哲司	ローマ字氏名：Sugiyama Satoshi
研究協力者氏名：竹田 真衣子	ローマ字氏名：Takeda Maiko
研究協力者氏名：番場 夏希	ローマ字氏名：Banba Natsuki
研究協力者氏名：箕輪 有朝	ローマ字氏名：Minowa Arisa
研究協力者氏名：杉山 宗悦	ローマ字氏名：Sugiyama Souetsu
研究協力者氏名：田中 丈敏	ローマ字氏名：Tanaka Taketoshi

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。